

武州みだけ  
第五十五号

令和2年6月30日「大祓式」





お初にお目にかかります。私、令和

元年度より当社の本務員に選定いただきはや一年。ならびに、東京二十三区内から御岳山に移り住まわせていただいてから一年と少々でもあります。

今号の『祭時記』は、僭越ながらそんな新米神職よりお届けいたします。



## 【令和元年 七月・八月】

本務新任奉告祭。緊張のなか迎える日々の神明奉仕。ある日は山を歩き、ある日は滝に打たれ。またある日は参道や集落内の木を伐り草を刈り。腰から鋸や鉋を提げ、手には大鎌や草刈り機を持つ人々…あれ？この人、ついさっきまで装束を着ていたような…？

ご先祖様には大変失礼ながら、盆の迎え火も送り火も慌ただしく焚く。

## 【九月・十月】

雅楽講習会と祭式講習会。いずれも一流の先生方にお越しいただき、直接ご指導、ご教授いただける事に感謝。

欲にかられ、古文書を読み、気学にも触れていくなか、二度にわたる大型台風の猛威。数箇所に崩落が起こる。山上の復旧や整備には、まず自分たちが動かねばならぬことを知る。魔を射る流鏑馬祭に穏やかな日々を祈る。

風呂場の備品を無垢材に替えてみたところ、みるみるうちに多種多様なカビが発生。恐るべし、「霧の御嶽」。

## 【十一月・十二月】

秋季大祭。中だるむ間もなく、紅葉の盛りに多くの方を迎える。落葉や雪が積もったなら、いつ何時、誰ともなく境内や参道を掃き清める。そんな山の民たちへ尊敬の念を増すとともに、私もそうありたいと思う。また街よりおよそ四〜五度は低いという寒さにあてられはじめたのも丁度この頃。

立地上、七五三のお詣りの方は少ないので、じっくり御祈祷におつとめいたします。防寒対策をなさつて是非。

## 【令和二年 一月・二月】

新年一番祈禱から元旦祭。多くのご参拝の方に驚き額に汗。念願であった太占祭へご奉仕。講の皆様とのふれあいや、ご参拝の方とのお話などから、当社の歴史や独自性を再認識し、自らが伝え継承していく立場にあることの重みと責任を感じを引き締める。

この頃になると、朝一番、外が雪化粧をしていようと、視野一面の銀世界が拡がっていくように、もう驚かない。

## 【三月・四月】

春季大祭。突如として訪れた新型コロナウイルス感染症の恐怖。恒例の講社代参や、剣道大会等の催事が次々に中止。神職の本道たる祭典も規模縮小を余儀なくされる事態に。花も咲き緑も萌え、天気も良いというのに。閑散とした山に一抹の不安をおぼえる。

快復を祈り、収束を乞い願う一節を加えるようになった、毎朝の日供祭。



## 【五月・六月】

山をあげての例大祭・日の出祭も史上初の縮小。宝物殿と授与所を閉鎖、緊急事態宣言が解除されたのち、対策を施し再開する。人の移動が少ないためか、山も活き活きし、動物との遭遇率も上がる。境内から見やる東京の街は冬の空かと思うほどに澄んでいた。

山の茅を刈り、伝統に則って茅の輪を編んだ。この「夏越の大祓」を機に、少しでも良き方へ向かいますように。

目まぐるしく、あつという間の一年。しかし、山の民はよく笑う。先輩方は、神明奉仕に勤しみながら宿坊を営み、料理を振る舞い客をもてなし、樂を奏し神楽を舞い、草木を整え畑を耕し、救難救助に出動し、雨にも風にも雷にも雪にも獣や虫にも負けず、山上生活の不便さは微塵も感じさせず、よく動き、よく笑いながら暮らしている。

この今まで街では出会ったことのない、生活力に満ち、年のわりに若く、活き活きしている人、というのがそこらじゅうにいる。恐ろしい。山の良い水と空気がそうさせるのだろうか。

とはいえ、私も少しづつでも、そんな「山の民」に近づけるよう努めます。まずは笑顔、笑顔。（記 服部朋也）



## 御嶽神社あれこれ

## 『幕末のコレラ流行と御嶽山御師』

鞆矢 嘉史



新型コロナウイルス

スは世界的に流行

し、日本でも感染が

収まりません。武蔵

御嶽神社では一日も

早く終息するように

祈願を続けています。ところで、江戸時代末期から明治時代前期にはコレラの世界流行が何回もおこり、日本にも及びました。

安政五年（一八五八）旧暦五月、感染した船員が乗るアメリカ船が中国の上海から長崎港に入港し、日本にコレラが上陸しました。日本では二回目となるコレラ流行、安政のコレラ大流行の始まりです。コレラは長崎から中国・関西地方に広がり、六月には東海道沿いの町で流行し、七月に江戸に侵入しました。八月には江戸近郊まで急速に感染が拡大し、さらに東北地方にも広がり、九月に終息しました。

コレラは突然発病し、激しい腹痛・嘔吐・下痢に苦しめられ、場合によると数日で死に至ります。人々はコレラを「コロリ」と呼び、即死病として恐れしました。人口百万の都市だった江戸では約三万人が亡くなったとされています。症状を目の当たりにした人々の中には、コレラは、異国から到来した「悪狐」の仕業、すなわち人体内部に侵入できる「くだ狐」によって発症すると思われる者も現れました。御嶽山と同じく大口真神を御眷属とする三峯山（埼玉県秩父市・三峯神社）には、安政五年八月に数千人の代参者が登山し、一万を超える大口真神の御札が下付されました。「悪狐」を退治できるのは、狐の天敵

のニホンオオカミしかいない」と信じ、多くの村や町がおいぬ様を拝借したのです。

御嶽山でも「諸国一統病氣流行」を受け、二名の若い御師が、安政五年九月、川越町（現・埼玉県川越市）で、神輿に幣串・鏡などを立て、神輿を守護する像（前立）として、所持する「木像・黒白之神狢等」を置いて幕を張り、高張提灯・旗などを立てて「開帳同様」の形とし、神札を配札しました。結果「数多参詣相招、札料・賽銭等」が奉納されました。二名の御師は、川越町にとどまらず、「在々村々」、さらに中山道の桶川宿（現・埼玉県桶川市）から新町宿（現・群馬県高崎市）まで巡行しました。御嶽山のおいぬ様（黒白之神狢）もコレラ流行に際して信仰を集めたことが窺われます。

とはいえ、御嶽山に伝わる古文書で、コレラ流行に直接関係する史料はあまり多くありません。コレラが大流行した安政五年にも、御師たちが例年通り講中を廻り、おいぬ様などの神札を配っていた記録が相当数残されています。コレラ流行のなかでも、御嶽山御師の多くは、着実に村々・町々を歩いて配札し、講中に対して家内安全などの祈禱を執行したと思われる。江戸時代を通して講中と御師の間で培われた日常的な堅い紐帯によって、御嶽山はコレラ流行に対峙したのではないのでしょうか。

新型コロナウイルス流行で不安が続く毎日ですが、感染対策を十分行つて堅実に日常生活を送り、従前通り変わらずに御嶽大神の御神徳を信じ、流行終息を願うことが大切なのかもしれません。

【参考文献】最終ページに記載

御嶽山の  
流鏑馬祭

九月二十九日  
夕刻五時 祭典  
五時半 行事

流鏑馬というと馳せる馬上から三つの的めがけ鏑矢を射る武将姿を想像しますが、御嶽の流鏑馬には馬が登場しません。江戸時代初期から記録に残る神事で、旧暦九月二十九日夕暮れを待つて行われ、二月八日に日の出とともに行われる「日の出祭」と陰陽対の祭儀として受け継がれています。

旧暦二十九日は新月の前日から前々日、月明かりのない闇の中、かがり火をたよりに今日同様に行われていました。神社での祭儀を終え鳥居前広場に着いた斎主の指示で、かがり火に照らされた広場の東西に騎手、南北に的の所役が移動し、騎手の「ようございますか」の発声で静かに儀式が始まります。騎手両者は時計回りに一周し、戻ったところで弓をはじく所作を行います。弓をはじく鳴弦の音は、悪霊退散を意味するといわれ、墓目神事でも使われます。結核・チフス・ペスト・コレラなどが流行ると、古くはこうした神事が各地で行われました。

三週目に弓を射ると集まった人々は矢に射られた的を意味する木片を持ち帰ります。

矢で射貫かれ、魔を滅するとされる木片に、焼き魚をのせて食べると、無病息災が約束されるといわれています。木片は、ご神木の檜や杉を薄く裁断したものです。

つかの間の儀式ですが、かがり火に照らされた神職の白い装束が夕闇に映え、参列者には深く印象に残る事でしょう。





〔連載〕 武蔵御嶽神社宝物シリーズ 30

## 「橋」千蔭筆『御嶽山』社号額

日本風俗史学会 會員  
前青梅市文化財保護審議会会長

齋藤 慎一

武蔵御嶽神社の社号は、江戸時代初期には、明暦二年（一六五六）五月二日の神社奉行への訴状に「武州御嶽金峯山蔵王権現」、更に古い天正一九年（一五九一）十一月の徳川家康の署名入（御判物）の寄進状には「御嶽権現」とあります。

江戸時代後期、幕府の命令で武蔵国全体

の地誌「新編武蔵国風土記稿」が編集されます。御嶽神社の調査は、文化十二年（二八一五）四月、「風土記稿」には、正門の仁王門（現在随神門）に「東国社稷総社 御嶽山」、二の鳥居には「武蔵国号社」の額があつたと記録します。しかし五十三年後、多分明治維新の折に取り外され、仁王門の分のみ宝物殿に現存します。

額は、江戸の浅草橋場町の講中からの寄進で、文字を書いたのは町奉行所与力の加藤又左衛門橋千蔭（一七三五～一八〇八）でした。千蔭は、国学者加茂貞淵の門人で、有名な本居宣長とは同門であつた歌人で国学者です。（後述）



橋千蔭筆「御嶽山」社号額



(裏面)

写真をご覧ください。柂目の総松木造りで、縁は平安風の花尖形で白木の生地を生かし、木口と匡郭と文字にのみ墨をさします。神社らしく古雅で簡素、清々しい意匠です。寸法は、全体で縦120cm余、横76.5cmで、文字面は58.5cm x 106cmです。三行にわけて冠称にした

「東国社稷総社」は、関東の土地と穀物のすべてを守護するお山」という堂々とした社号です。社稷には国家の意味もあつて重みがあります。また、御嶽が農業神として古く信仰されてきた神格をも表現し得ています。初期の社号が仏教教的で祭神を中心としたものに対して、当時の祭神の大国主神（大物主神）、少彦名神、廣國押武金日命（蔵王権現）など「記紀」のいう国土経営の神徳の表現です。

十五年ほど年代は下りますが、天保二年（一八三二）十月刊の一枚刷「御嶽山略縁起」（青梅恩田家文書）ではこの二つの社号を、表題の「御嶽山略縁起」の上に「御嶽国号社」と「東国社稷総社」を並べて二行に角書としています。

この縁起書は一般向けですが、「延喜式」や「日本書紀」・「古事記」・「万葉集」など日本古典、本居宣長の「玉鉾百首」を引用して、当時盛んであつた「国学」系統の作文です。前号の「太々神楽」で紹介した、御嶽山へ文化十年代から訪れていた秩父の神職で国学者の齋藤義彦の執筆と推定される国学の考え方の縁起書です。

一方、この神号の起点の背景は、享保十二・十九年の二度の八代將軍吉宗の御嶽神山上覧だと思えます。八代將軍吉宗は、保存の指示を神社奉行から奉書で伝え、神宝に対して「武蔵国之宝器」という評価を神主に伝えていきます。その將軍の権威を背景にして御嶽側での神威高揚のための解釈があつたようです。寛延二年（一七四二）正月、神主の浅羽蔵人の宝物収納の宝蔵建造出願に関わると推定される「武州御嶽山起立覚」には、「為社稷守護之蔵王権現

一国一社」「東国社稷之総社二而御座候」とある社号が目玉されます。三度目の十代家治將軍の上覧にあつたの答申書には、吉宗の発言と共に、「武蔵国号社」の社号に近いものが使われています。やがて、御嶽神社の神威を示す社号として定着、文化二年頃までには、正門の仁王門や二の鳥居に高く公称として掲げられるに至るのです。時代の権威や学問の深化を背景としての神社の存在感の明示です。

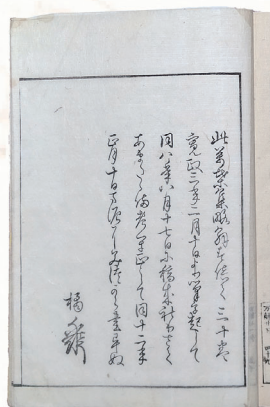
さて額の裏面には、釘を打ちはじめ込んだ横棧が外れた跡があります。針金を付けて仁王門に掲げるための棧でしょう。表と柂洪塗の裏にそれほど風化の跡が無いのは、短期間の掲示であつた証拠です。

裏面には、「文化二年歳次乙丑（一八〇四）槐（秋）閏八月二十有八日」橋千蔭書」とやや上部に三行に彫字、下部の行間、中央に「當山大宮司 大仲臣朝臣 郡枝」、その右側に「江府（江戸）御使者狗講中 世話人 橋場町代参講中」、左に「願主當山奏者 柴崎信濃正藤原郡光」と楷書で二行に彫りつけます。

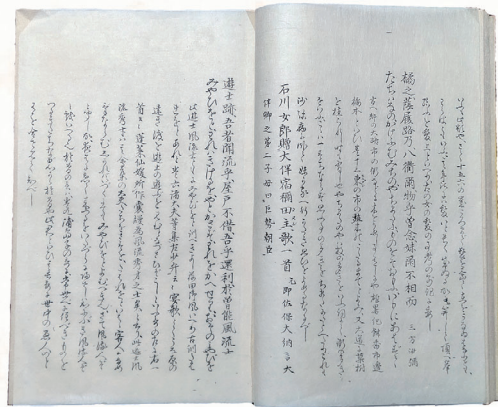
文化二年八月二十八日に、「千蔭流」の書道家でもあつた橋千蔭が筆をとり、世話人は、江戸の御狗講中の橋場町（浅草の隅田川沿いの町。現在台東区と荒川区。千蔭の別荘の石浜庵があつた）代参講です。願主は、講の先達の柴崎信濃正藤原郡光です。奏者とは、講のリーダーでしょう。

御嶽神主の金井勇助政国の養子で江戸から来た大輔郡胤は、この橋場町にあつた橋場神明宮の神主鈴木兵部の二男です。鈴木家も年頭に江戸城へ登城し、御嶽神主家と同格です。父の鈴木兵部は、安永九年





「万葉集略解」二十巻の跋



「万葉集略解」筆写本 二巻の本文

(二七八二)十一月。二の鳥居を御嶽に寄進、この額と対になる「武蔵国号神社」の額を揚げました。郡胤は、実父や兄兵庫と共に「大宮司大仲臣郡胤」と刻まれています。橋場町の講の人々には、なつかしい鳥居だったでしょう。仁王門の額の裏面の「大宮司大仲臣朝臣郡枝」はこの郡胤の孫で、名乗り方が似ていて、継続した企画とも感じられます。しかし、金井家文書、また金井家の講にも、江戸浅草橋場町の講は見当たりません。そして筆者の橘千蔭ですが、これは捕物帖など時代劇でおなじみの北町奉行配下寄力の二十五騎の一人で、吟味役(公私の訴訟、裁判、処刑に関わる)とい

う重職にあった人です。同じ八丁堀の同心五十人はその配下です。奉行所では、奉行の側近、調査担当です。江戸天下祭の折は、麻袴姿で、騎馬の与力五騎が祭礼行列の警固として、江戸城の田安門・半蔵門への入城まで付き添っていました。城内へは入らず、城門で御先手寄力へ引き渡すのです。江戸の町人達にとっては身近な武士で「八丁堀の旦那」などと呼ばれていました。

与力は御家人で、石高二百石、役料三十石と小身ですが、職掌柄、大名方から公式の付け届けは、年三千両はあったとか、広い屋敷地を貸地としての収入があり、富裕であつたそうです。武士でありながら遊芸や学芸に遊ぶ余裕があり、江戸の文化・文政期の学問や諸芸術の興隆期の一翼を担いました。千蔭の父枝直は、国学者の加茂真淵の友人で歌人です。真淵が江戸へ出てきた時には、与力屋敷に住居を提供し、和歌の交遊をし、十四歳の千蔭を真淵入門させています。千蔭は、以後二年間、この「近隣り」の国学の大家、真淵の膝下にありました。したがって「古事記伝」を著した伊勢の本居宣長とは同門の学友でした。

さて、千蔭が入門した頃の真淵の歌風は、古今調でしたから、千蔭も古今調となりました。その後、真淵は万葉集を研究し「万葉集考」という註釈書を著します。千蔭もその研究作業に関わり、万葉集への知見を深めました。千蔭は研究者というより、国学の中心となる万葉集の大切さ、魅力をどうかして多くの人に理解し、楽しんでもほしいという歌人としての考え方で註釈書「万葉集略解」を著し、二十巻三十冊を刊行します。千蔭の考えは当たり、以来明治に到

るまで、万葉集の註釈書として最も多く刊行されました。千蔭の三人の学友も協力し、殊に本居宣長は、千蔭の問題提起にひとつひとつ至当な意見で答えました。千蔭はその意見をすべて、「宣長云(言)」と明記して引用しました。宣長はそれ以前に「万葉集玉の小琴」という註釈書を著していたのですが、途中でやめて千蔭に協力したほど真剣でした。「万葉集略解」での宣長の存在は大きなものでした。

この優れた註釈書は、版行された文字が優雅で美しい、書道のお手本になりそうな見事な筆跡です。万葉集の「本文(漢字表記の短歌)」は、楷書の漢字で、その横の読み下し部分は、楷書の仮名、二字下げた「註釈・学説」部分は、少し小さな行書の漢字仮名交じりで整然と書き分けています。千蔭は「草書の仮名」の名手とされ、「千蔭流」として有名で、多くの人々に使われ三十点近いお手本が、没後も近代まで刊行されました。「略解」の版下書には、千蔭の筆跡へのこだわりを感じます。

千蔭は「略解」の跋(あとがき)を、その草書の仮名で書き、「略解」は寛政三年(二七九二)に開始し、「同十二年(一八〇二)正月十日までにみづから書きおはりぬ」とありますので、「略解」の版下書は千蔭の筆によるものともよめます。得意の草書を避けて、読みやすい、楷書と行書です。版下書は千蔭でなければ、千蔭の意になつた筆力を持つ人であつたと思います。

もう五十年も昔、私はアララギ派の歌人であつた叔父 桜木成一から贈られた「万葉集略解」の三十冊揃いを持っています。しかし、一、二冊目の刊本が不足して、筆

写本で補充しており、それが刊本の筆跡と類似していて、伝橘千蔭筆写本といわれました。二冊目の橘千蔭の、二つの雅名「橘千蔭」「橘八衢」のもとになった和歌の部分と刊本の跋の部分をお目に掛けます。

御嶽山の社号額も、草書の仮名の手書の千蔭の作品としては、楷書体と行書の漢字であるのもめづらしい。神社の額を揮毫の例もありません。制作年代がわかるのも貴重です。しかも町内の講中のための揮毫です。「万葉集略解」著作の発想と同じような千蔭の人物を想像させるものがあります。

国学者との縁の多い御嶽山に、国学の主流にあつた加茂真淵や本居宣長と深く交流し、その都会性故に江戸派と称された橘千蔭の名筆が社号額として庶民的な浅草の講を仲介として今に存在していることに感慨を覚えます。

なお、青梅の文人で御嶽山へも何度も訪れた黒田庄左衛門(山田早苗)は、「玉川派源日記」の中で、前出の「御嶽山略縁起」を「日本書紀」「古事記」「延喜式」を引用し、文献批判(考証)しています。また、「永久田家務本伝」で千蔭の「万葉集略解」から、本文の頁数(丁附)まで付けて引用しています。

#### 【主な参考文献】

「日本古典文学大事典」(岩波書店)  
「町奉行与力の風流な生活」(昭和女子大学 光葉博物館図録二〇一一年)  
「原胤明旧蔵資料調査報告書」(千代田区 教委 二〇〇八〜二〇一二年)  
「時代風俗考証事典」(林美一 河出書房 新社一九七七年)



令和五年

## 大口真神式年祭

おいぬ様で知られる「大口真神」は、男具那社のご祭神である「日本武尊」の御眷属であり、また火難盗難、諸災退除の守護神として祀られております。

『日本武尊御東征のみぎり、山路險しき道で邪神の妖霧に犯され道を失いし時、忽然と白狼が現れ道案内をして尊の難をお救いしたとあり、尊より、これより御嶽神社の御使者として世の人々を救うようにと仰られた。』

ことから大口真神として境内に鎮まり、多くの人々の信仰を集めております。当社では平成二十三年より、御神像をご本殿にお遷しして行われる、大口真神式年祭を十二年毎に行うこととなり、令和最初の御開帳大口真神式年祭が三年後に迫って参りました。

昨今の自然災害、世界的な疫病の蔓延と私達の生活を脅かし、誰もが先の見えない不安な日々を過ごしているこのような時こそ、諸災退除の守護神である大口真神の御神徳を輝かして、世界の平和と安寧、そして講中崇敬者皆様の家内安全・商売繁盛・厄難消除を式年祭でお祈りするのです。現在その準備を進めておりますが、詳細につきましては来年以降改めてご案内を致します。

## ご奉賛のお願い

式年祭にあたり、境内整備等を順次進めております。現在は、皇御孫命社、常磐堅磐社の修理を行っております。また、国宝「赤絲威鎧」は明治三十六年の修理後一〇〇年が経ち漆の剥離等進んでいるため、一〇〇年先まで変わらない姿でいられるよう十分な修復を行う予定です。他に宝物殿の改修工事も準備しております。

これら整備事業に、深いご理解とご信仰を賜り、皆様の心からの御奉賛を仰ぎたくお願い申し上げます。

御奉賛 一口 二千元



## 敬神奉賛員通信

敬神奉賛員の皆様には、深いご理解とご信仰をいただきまして、誠に有り難く感謝申し上げます。

関八州総守護社である武蔵御嶽神社の護持発展ならびに、ご信仰厚き皆様の安寧のために創設されました敬神奉賛員も、多くの方にご賛同いただき、お陰様を持ちまして奉賛会設立への一歩を踏み出す程に成長いたしました。これも偏に奉賛員の皆様のお陰と厚く御礼申し上げます。

本来であれば、今秋に第一回目となる「奉賛員大祭」が執行されるはずでしたが、新型コロナウイルスの感染拡大防止の為、残念ながら今回は延期とさせて頂きました。現在の社会情勢を鑑みると年内開催は難しく、来年十月に開催を予定したいと存じます。詳細が決まり次第ご連絡をさせて頂きます。

今回の新型コロナウイルスによる影響は、通常の神社運営にも大きな変化をもたらしました。日の出祭の縮小はもとより、講中の春参りの自粛、御朱印は書き置きのみ対応など寂しいものでした。しかし、電話・ファックスでの御祈祷・御守り等の受付を積極的に行い、参詣できない方のためにも努力を致しました。また、毎日行う朝拝と夕拝では、新型コロナウイルスの一日でも速い収束を願う終息祈願を加えさせて頂き、今も続けて行っています。

今後とも皆様方の心の拠り所として、その役割を全う致したく神社を運営して参る所存でございますので、変わらぬご信仰をただけます様、お願い申し上げます。

## 敬神奉賛員募集のご案内

当社では、敬神奉賛員を募集しております。敬神奉賛員とは、御嶽大神の御神徳を敬い、皆様の心の拠りどころとして、また武蔵御嶽神社の更なる護持発展を目的に創設いたしました。

奉賛員には例祭、祭典・行事のご案内のほか、新年に向けての御神札など各種の特典が受けられます。趣旨にご賛同いただき、ご入会下さいますようお願い申し上げます。

賛助費 五〇〇〇円

※詳しくは、社務所までご連絡下さい。

# 新任あいさつ



総代 小高 義行

この度、由緒ある武蔵御嶽神社の総代を仰せつかりました、小高義行でございます。

人生折り返しを過ぎた私に、この様な大役が務まるかはなはだ心配ではありますが、須崎宮司を始め、神職の方々のご指導を受けながら、日々勉強と考え、一生懸命努めていく次第でございます。これからもどうぞ宜しくお願い致します。



総代 秋山 佳久

宮司と本務職員十二名が直接神社を管理しており、その手助けをするのが総代です。大祭・中祭で宮司を補佐し、小祭では必要に応じて宮司の代理を務め、宮司の諮問に意見を述べ、会計監査を行うことが主な仕事です。極めて微力ながら、その職責を全うしたいと思います。



本務職員 馬場 慶太郎

この度本務を仰せ付かりました権禰宜の馬場と申します。私は國學院大学神道文化学部を卒業し神職資格を取得した後、東京都板橋区は氷川神社に三年間奉職をさせていただいておりました。二年前より御嶽山に戻って参りまして、生家である宿坊 駒鳥山荘の仕事を熟しながら、幼い頃より目にしてきた御嶽山の仕事に携わってきました。

そんな中、今夏より武蔵御嶽神社で本務員として選出され、恐れ多くも光栄に存じております。生まれ育ったお山の神職として社務に携われることは大変名誉であり、先祖代々が受け継いできた御嶽の歴史の一頁を紡ぐことに誇りをもって社務に勤しんで参ります。

まだまだ若輩者でございますが、宮司はじめ諸先輩方にご指導をいただきながら、講中やご参拝者の皆様になしでも御嶽神社の歴史や風土をご理解いただけるよう邁進するとともに、私自身、御嶽の大神様をお守りする一心で精一杯努めて参る所存でございます故、御社頭で見かけた際には是非お気軽にお声掛けいただければ幸いです。

東京都青梅市 御岳山...  
首都圏近郊で人気のハイースポットある。

御岳山頂に鎮座する武蔵御嶽神社の  
大日真神は、  
お大様の愛称で  
関東両で親しまれる。

神社の宝物殿には、  
源平時代の大鎧があり、  
全国的な知名度を  
誇っている。しかし、

その鎧を奉納した  
白山重忠の立派な  
伊達軍の旗印が、  
ほとんど知られていない。

## 御岳山の行事

令和二年

一月 一日 元旦祭

三月 三日 太古祭

二月 三日 大日真神社祭

二月 初午 稲荷社祭

三月 二十三日 天長祭

三月 八日 春季大祭（祈年祭）

四月 二十日 奉納俳句奉告祭

四月 十六日 産安社祭

五月 二十九日 奉納剣道大会・介山祭（中止）

五月 七日 日の出祭（宵宮）

五月 八日 日の出祭（神輿渡御）

五月 十五日 男具那社祭

六月 二十一日 大日真神社祭

六月 二十一日 神楽と雅楽の一般公開中止

六月 二十七日 修行体験講座（二泊）中止

七月 三十日 夏越大祓

七月 十八日 レンゲショウウマまつり（九月十二日）

八月 十八日 新神楽

九月 十九日 滝行体験講座（中止）

九月 六日 カンタンを聴く会

九月 十二日 新神楽

九月 十三日 一日修行体験講座

二月 二十七日 御岳山天空緑日（中止）

十月 二十九日 大口真神社祭・流鏑馬祭

十月 十一日 敬神奉賛員大祭（中止）

十月 十八日 神楽と雅楽の一般公開

十月 十七日 天空もみじまつり（十一月二十三日）

十一月 二十四日 （十一月二十三日）

十一月 八日 秋季大祭（新嘗祭）

十二月 二十三日 末社祭

十二月 八日 御岳登山競走（中止）

十二月 三十一日 大祓

六月～十一月 第四日曜日 夜神楽中止

毎月 八日 月次祭

毎日 日供祭



## 神社の杜(五十五)

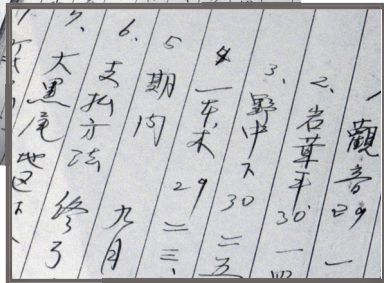
## 「」の山林は何処? 「共有山の日誌から」

御岳山一帯の山林は、武蔵御嶽神社社有林、私有林、そして共有林が多くを占め、国や都など公の山林は殆どありません。

共有地や共有林とは、村や地域などでその構成員が共有する森林や植林地をいいます。御岳山の場合は、御師等山上住民が共有の構成員に当たります。共有地や共有林は、広い山林もあれば、家一軒建たない狭い土地までいろいろです。例えば、昨年倒れた滝本の太銀杏が立っていた処や、国の天然記念物になっている神代櫓が立っている土地、山上に二か所ある墓地、そして

これからお話しする山林、それらを合わせた面積は、なんと約六十八ヘクタール。これは明治神宮(神宮の森を含むため)が七十ヘクタールですから同じくらいの面積を所有していることとなります。今回はその共有の日誌に出てくる山林の名前のお話です。

手元にある共有日誌は昭和三十年頃から綴られているものです。総会や役員会の議事録的なものですが、折れた神代櫓の枝の入札、山林の下刈りの入札など山林に関係する事柄も多くみられます。そしてその中に



「共有日誌」から

今ではあまり聞くことが少なくなつた山林の地名が数多く出てきます。いくつか挙げてみましょう。野中裏・ハシバ下・観音・花水・尾平(オダイロ)・大黒尾(ダイコクノオ)・琴沢入・滝本入など。

現在であれば御岳山〇〇番地とか御岳二丁目〇〇番地などと現しますが、昔はたぶん字や小字で呼

## 片柳 茂生

び合っていたのでしょうか。ここまでであれば何とか見当が付きそうです。しかし先輩たちはさらにややこしい名前を山林に付けたのです。

「芝(死馬)捨」ふむふむ、「一本木・岩茸平・瘤木」おや? 「学校山・研究会・麻雀山」ううむ。

こうなると何処の事やら皆目見当が付きません。先輩たち曰く、「麻雀山」は、下刈りやら雪起こし(雪で倒れてしまった若木を起こす作業)やらの人足で集まったのに、何故か仕事もせずに麻雀に明け暮れてしまう山。誰が山に麻雀パイを持っていくのでしょうか? 面白い名ではヨーロッパ山という山林もありました。「此処に植えた木が育つて売れたらみんなでヨーロッパ旅行に行こう」という意味で付けられたようですが、今の材木事情では・・・夢は儚く消えてしまい、常磐ハワイアンセンターにだって行けそうにありません。

まあまあそれはともかく、先輩の皆さん「一本木・岩茸平・瘤木」この地名何処だか教えて下さい。気になってしょうがないのです。

## あ と が き

新型コロナウイルスが世界を駆け巡り、日本だけでなく世界は一変してしまいました。御岳山でも自粛の中、昔に戻ったかの様な静かな山里には、鹿や猪が隣人かのように頻りに訪れていました。夏を迎えると参拝者は徐々に増え、参拝を済ませると、皆人様にさわやかな顔で帰っていかれました。今後規制も弱まり生活も戻っていくでしょう。新生活様式の中、まずはこのウイルスに対抗する手立てが一日でも早く確立する事を期待しつつ、御嶽大神に世界と日本の平和、皆様の安寧をお祈りするとともに、ウイルス退散を祈願する日々は続きます。

最後に、この半年間を無事に過ごせたことを御嶽大神に感謝し、毎年丁寧に教授下さる先生方、ご奉納頂きました皆様、各種祭典や行事に御協力・御協賛下さいました崇敬者の皆様、各所関係機関の皆様様に厚く御礼申し上げます。また、齋藤慎一先生玉稿を有難うございました。

令和二年 十月一日発行

〔年二回発行・非売品〕

編集 武蔵御嶽神社

TEL 〇四二八(七八) 八五〇〇

FAX 〇四二八(七八) 九七四一

印刷 (株)成和印刷  
http://www.musashimitakejin.jp/

【P3「幕末のコレラ流行と御嶽山御師」参考文獻】  
酒井シツ『病が語る日本史』(講談社、平成十四年)  
高橋敏『幕末狂乱 コレラがやって来た!』  
(朝日新聞社、平成十七年)  
『武州御嶽山文書 第三巻』  
(法政大学・青梅市教育委員会、平成二十年)